日本輸血・細胞治療学会　e-News

2025 9 月号

日本輸血・細胞治療学会　ニュースレター　第 30 号

【本号の掲載記事】

1．　**第 32 回日本輸血・輸血細胞治療学会秋季シンポジウム開催に寄せて**
千葉県赤十字血液センター
奥山　美樹

2．　**アフェレーシスナースの存在意義**
―病院・血液センター・臨床技術職からの多職種ディスカッション―
千葉大学医学部附属病院看護部　放射線・中央診療施設
猪越　ひろむ

3．　**輸血の臨床－輸血の実際、どこまで知っていますか？**
がん・感染症センター　都立駒込病院　輸血・細胞治療科
佐久間　香枝

4．　**～全国各地の合同輸血療法委員会～**
愛知県合同輸血療法委員会の活動
名古屋大学医学部附属病院　輸血部
松下　正

5．　**編集後記**

6．　**一般社団法人日本輸血・細胞治療学会　広報委員会**

第 32 回日本輸血・輸血細胞治療学会秋季シンポジウム開催に寄せて

千葉県赤十字血液センター
奥山　美樹

2025 年 10 月 24 日、25 日の 2 日間、東京都江東区有明の有明セントラルタワーホール＆カンファレンスにおいて、第 32 回日本輸血・輸血細胞治療学会秋季シンポジウムを開催いたします。開催にあたりご協力いただきましたすべての関係者の皆様にこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。

ゆりかもめから望むフジテレビ本社ビルと都市風景

今回のシンポジウムのテーマは「つながり」としました。「つながり」を感じていただけるプログラムを、いろいろ企画準備をしているところですが、詳細については重複となりますので、抄録集や本シンポジウムのホームページでご確認いただくようお願いして、本稿では開催地有明について紹介していきたいと思います。

有明は、東京都江東区の深川地域にあたる東京臨海副都心の一部で、その名の通り海に面している埋立地です。臨海副都心は台場地区、青海地区、有明北地区、有明南地区の 4 地区に分かれます。本来は台場地区の通称が「お台場」なのですが、元都知事の石原慎太郎氏が臨海副都心全体を指して「お台場」と呼んだことから、広義で同様に使われることも多いようです。ただし、一般的には台場地区（本来の狭義のお台場）と青梅地区の商業地が「お台場」とされています。

臨海副都心の建設が始まったのは 1989 年ごろからです。バブル崩壊により企業の進出がキャンセルされることもあり一時は開発計画が見直されたりもしましたが、1993 年のレインボーブリッジの開通、1995 年のゆりかもめの開通などを経て、1999 年にフジテレビの本社社屋が移転したころより次第に大型イベント会場、アミューズメント施設、ショッピング施設などが開業充実してきて、現在の姿になっています。

また、2020 年東京オリンピックで会場となった施設が有明には点在しており、テニス会場だった「有明テニスの森」、バレーボール会場だった「有明アリーナ」、トライアスロンと水泳の会場だった「お台場海浜公園」などのほか、有明体操競技場だったところは後利用として「有明 GYM-EX（ジーメックス）」という展示場に再整備されています。

さて、会場近辺には商業施設やアミューズメント施設がたくさんあります。以下にその一部をご紹介しますので、秋季シンポジウムの終了後などにお楽しみいただく参考になればと思います。詳細は各ホームページをご覧ください。

❖「フジテレビ本社ビル」
https://www.fujitv.com/ja/visit_fujitv/?_ga=2.264931785.714949175.1756281566-1797259521.1753771984
大きな球体の展望台が遠くからも目立つ有名な建物です。展望台（はちたま）は25階にあり臨海副都心を見渡せる大パノラマが楽しめます（有料）。そのほか見学できるギャラリーやキャラクターショップなどもたくさんあり、ここでお土産を買うのも良いかもしれません。

❖「東京ジョイポリス」 https://tokyo-joypolis.com/
ゆりかもめのお台場海浜公園駅近くの、大型商業施設「デックス東京ビーチ」内にある、国内最大級の屋内型テーマパークです。たくさんのアトラクションがありますし、屋内なので天候に関わらず楽しめるのが利点です。

❖「東京トリックアート迷宮館」 https://www.trickart.info/
ジョイポリスと同じく、デックス東京ビーチ内にあるトリックアートのアミューズメント施設です。トリックアート美術館は国内各地いろいろなところにたくさんありますが、ここでは世界初の「江戸エリア」や「愉快な忍者とおばけエリア」があるのが特徴です。

❖「チームラボプラネッツ」 https://www.teamlab.art/jp/e/planets/
有明からゆりかもめで4駅（6分ほど）の豊洲にある、身体ごと没入するというちょっと変わった体験型のデジタルアートミュージアムで、実際にはだしになって水に入っていきます。サイエンスとアートの融合が感じられます。

❖「UWS AQUARIUM GA☆KYO」 https://uws-gakyo.com/
2022年にオープンした新しいアート施設です。日本伝統とアクアリウム（水族館）をコンセプトに、煌びやかな世界観で錦鯉や金魚を鑑賞するという日本の伝統文化を表現した作品を楽しめます。一言で表現すれば、「和風の美術館的水族館」という感じでしょうか。

夕焼けの東京お台場レインボーブリッジ周辺

夜のレインボーブリッジ

紙面の都合上ごく一部に限られましたが、シンポジウム会場近辺の遊べるところを紹介しました。なお、実際に行かれる際には各施設の営業時間や予約の要不要など、必ずご自身でご確認の上お出かけいただきますようお願いいたします。

さて、今年の夏は長く暑い日が続きましたが、10 月下旬にはきっと過ごしやすい良い気候となっていることと思います。ぜひ会場に足を運んでいただき、他の施設の方々と直に顔を合わせてディスカッションをして、多くの方々と「つながり」を持ちましょう。そして、シンポジウムの合間や終了後には紹介したスポットで有明の街やお台場を楽しんでください。

より多くの皆様のご来場、ご参加を心よりお待ちしております。

アフェレーシスナースの存在意義

―病院・血液センター・臨床技術職からの多職種ディスカッション―

千葉大学医学部附属病院看護部　放射線・中央診療施設

猪越ひろむ

アフェレーシス（apheresis）は、ギリシャ語で「取り除く」を意味し、血液を体外へ取り出して特定の成分を分離・除去する治療の総称です。主な分離方法には、特殊な膜で病因物質を取り除く膜分離法と、血液成分の比重差を利用して遠心力で分離する遠心分離法があります。

遠心分離アフェレーシスは、輸血用血液製剤の製造、造血幹細胞採取や CAR-T 原料細胞作製など多岐にわたる治療を支えています。また、採取された細胞を用いて行われる治療では安全かつ確実に実施する知識と技術が求められます。近年、医療の高度化に伴い、アフェレーシスナース（以下、ApheNs）に求められる役割は拡大しており、採取の現場だけではなく、統一した看護提供のための治療計画の共有や患者教育、献血者への安全確保に向けた環境づくり、多職種連携の調整役としての機能にも注目が集まっています。こうした看護師の役割拡大に対応するため、日本輸血・細胞治療学会ではアフェレーシスの正しい知識を有し、アフェレーシスを受けるドナーと患者への的確な看護を実践し、アフェレーシスの安全性の向上に寄与することのできる看護師を育成することを目的として「学会認定・アフェレーシスナース制度」を導入しました。

アフェレーシス準備風景（血液センター）

本シンポジウム「アフェレーシスナースの存在意義―病院・血液センター・臨床技術職からの多職種ディスカッション―」では血液センター勤務と病院勤務、それぞれの ApheNs から現場での日常業務、役割、工夫、課題を紹介します。

血液センターからは、献血者の安全な成分採血を実現するための標準作業手順遵守、教育訓練、インシデント防止策、迷走神経反射（VVR）予防のための生活指導や環境整備などの取り組みをご紹介します。

アフェレーシス実施風景（病院）

また病院からは、病棟で活躍する ApheNs から、造血幹細胞採取、CAR-T 細胞療法や DLI のためのリンパ球採取に関連する統一した看護提供のためのクリニカルパス作成、知識共有の場の整備などが報告されます。
2 名の ApheNs からの業務紹介後、アフェレーシス現場で働く臨床検査技師、臨床工学技士を交え、ApheNs の存在意義を多角的に討議します。

被採血者の状態把握と異常の早期発見、副反応への対応、バスキュラーアクセスの管理、細胞の動員における指導や心理的サポートなど、多職種の中で発揮される専門性を共有し、より安全で質の高いアフェレーシスと治療の実現に向けた協力体制を検討する予定です。

現在アフェレーシスに関わっている方だけではなく、将来この領域に関わる予定の方、興味がある方にとっても、多職種連携や ApheNs の役割について理解を深める有意義な時間となるはずです。

現場のリアルな声と、多様な職種の視点が交差するこのセッションを通じて、ApheNs の役割について一緒に考えてみませんか？
皆様の参加をお待ちしています。

シンポジウム４「アフェレーシスナースの存在意義」
―病院・血液センター・臨床技術職からの多職種ディスカッション―

10 月 25 日（土）9：00～10：30

座長：猪越ひろむ（千葉大学医学部附属病院看護部放射線・中央診療施設）

1.　アフェレーシスナースとして，病棟からの活動
演者：横手恵子（群馬大学医学部附属病院看護部）

2.　血液センターのアフェレーシスにおける看護師の取り組みについて
演者：青島友子（静岡県赤十字血液センター）

ディスカッサント：
杉本達哉（東海大学医学部附属八王子病院）
松岡　諒（自治医科大学附属病院臨床工学部）

輸血の臨床－輸血の実際、どこまで知っていますか？

がん・感染症センター　都立駒込病院　輸血・細胞治療科
佐久間　香枝

第 32 回日本輸血・細胞治療学会秋季シンポジウムが 2025 年 10 月 24 日・25 日、有明セントラルホールにて開催されます。その中で、認定輸血検査技師更新必須講座「輸血の臨床－輸血の実際、どこまで知っていますか？」についてご紹介します。医療チームの一員として、検査技師に今、臨床現場で何が求められているのかを改めて再認識したいと考えます。
今回は、3 名の演者の先生方にシンポジウム形式でご講演をお願いしました。
簡単ではありますが、ご紹介させていただきます。

①医師の立場から（都立墨東病院　輸血科　藤田浩先生）
臨床検査技師が救急医療など臨床現場に立ち会う頻度は低いと思います。
輸血実施の場面で、医師の立場から臨床検査技師と情報共有する内容についてのご講演です。(1)緊急輸血：緊急輸血プロトコル、急速輸血ポンプなど。(2)交換輸血：院内合成血作製、交換輸血の手技など。症例提示しながら解説していただきます。（３）自己血：日本自己血輸血・周術期輸血学会が作成した実施基準の改訂（回収式自己血）などについて解説していただきます。

②看護師の立場から（都立墨東病院　看護部　海老根香先生）
輸血療法の安全確保には、的確な判断と技術が不可欠です。実際の輸血実施の場面において、臨床輸血看護師の立場からのご講演です。
内容については、（１）輸血同意書取得の確認（電子化された文書対応）（２）輸血ルートについて（輸血セット、カリウム吸着フィルター、微小凝集塊除去フィルターなど）（３）混合注射について（４）輸液ポンプ（５）患者確認についてです。本シンポジウムを通じて看護師が輸血実施にかかわる事で、インシデント・アクシデント防止の観点から解説していただきます。

③臨床検査技師の立場から（藤田医科大学病院　輸血部　白木 真理先生）
本発表では、当院における手術室輸血部サテライト業務と血液・細胞療法科病棟での輸血患者観察の２つの取り組みについて紹介します。いずれの業務も、具体的な内容や現場スタッフとの連携、迅速な対応体制に焦点を当てて講演予定です。

臨床現場での活動は、他職種との連携強化や臨床検査技師のスキル向上にも寄与しており、安全かつ適正な輸血療法の提供に貢献していると実感しています。実際の業務を通じて得られた、輸血専任の臨床検査技師としての役割や意義についても、私自身の経験を交えながらお伝えしたいと考えています。　（白木先生より）

これから認定輸血検査技師を目指す方だけでなく、すでに取得済みの方々にも、日々の業務に活かせる実践的な内容となっております。
皆様のご参加を心よりお待ちしております。

～全国各地の合同輸血療法委員会～
愛知県合同輸血療法委員会の活動

名古屋大学医学部附属病院　輸血部
松下　正

とても県庁とは思えない
名古屋城みたいな愛知県庁本館

https://www.photo-ac.com/
年一回この建物の中で合同輸血療法委員会は開催されています

各都道府県では、輸血を実施する医療機関、血液製剤を供給する日本赤十字社血液センター、および管轄する行政の三者による「合同輸血療法委員会」が組織されているところですが、本県においては愛知県センターの役割は、センターが供給する先の医療機関と委員会をつなぐ黒子的な、しかし重要な役割を担ってくれています。委員会は愛知県医薬安全課が事務所掌し、日赤愛知センターと県内で血液製剤の使用の多い医療機関の輸血部の代表者で構成され、各施設の血液製剤使用状況や輸血医療に関わる様々な問題点を共有し、適正輸血を推進することとしています。直近の活動としては、赤血球製剤の有効期限延長を踏まえ、県内の輸血医療に与える影響を評価するため、医療機関を対象とした詳細なアンケート調査を実施し、その結果を委員会で議論しました[1]。

令和 5 年度から令和 6 年度にかけて実施されたアンケート調査は、愛知県内の輸血用赤血球製剤供給施設 148 ヶ所を対象に実施し、回答率は 42.2%でした。有効期限延長が廃棄率に「影響がない」と回答した施設の割合は増加しており、現場が徐々に慣れてきている可能性を示唆しています。一方で、今回の 1 週間の延長による劇的な変化は感じられていないという意見も散見されるものの[1]、全体としては 45 施設が「全国的な廃棄率改善に期待する」と回答しており、潜在的な意義は広く認識されていると思われました。

血液製剤の在庫管理については、期限延長の後でも多くの施設で血液製剤の定数在庫を積極的に見直していないことがわかりました。このような施設では、有効期限が延長されても今のところは現在の在庫体制が十分であると判断しているようでした。また、有効期限延長に伴う温度管理の厳格化の必要性については各施設の認識の向上はみられず、課題と考えられました。

一方で、有効期限延長後の製剤の安全性に対する懸念も散見され、保存期間の長期化に伴うカリウム濃度の上昇や細菌混入リスクを指摘する意見がありました。今後現場の不安解消に向けたさらなる情報提供や啓発活動の必要性が示唆されます。

目下本委員会の活動範囲はまだまだ限定的であり、他の都道府県が取り組んでいるような、より広範な課題への取組が少ないと自省しております。今後、高齢化、地域偏在、災害リスクといった社会構造の変化を背景とした輸血医療の「再定義」と新たなシステムの構築について、他県の先進的な取り組みも参考にしつつ、活動範囲を広げていきたいと考えています。

1. 令和 6 年度愛知県合同輸血療法委員会議事録
   https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/554712.pdf

編集後記

第 32 回日本輸血・細胞治療学会秋季シンポジウム開催に合わせて、奥山会長、シンポジウム企画者である猪越様、駒込病院事務局である佐久間様からの記事を読み、チーム医療での「つながり」の重要性を改めて感じました。編集後記を担当した小生も、災害における輸血療法を企画させていただきました。有明のお台場の地に降り立ち、会員の皆様とともに輸血談義したいものです。また、愛知県合同輸血療法委員会の代表である松下様から最近の活動報告が紹介されました。赤血球液の有効期限延長に伴う院内在庫定数管理の見直しについて課題があるとの記事は参考になりました。輸血医療の「再定義」と新たなシステム構築は、どのようなものか？　知見収集や学会参加などで研鑽を積み、自問自答していきたいと思いました。

（藤田浩）

一般社団法人日本輸血・細胞治療学会　広報委員会

委員長

生田　克哉　（北海道赤十字血液センター）

副委員長

池本　純子　（兵庫医科大学病院）

委員(50 音順)

石井　洋子　（船橋市立医療センター）
北崎　英晃　（日本赤十字社北海道ブロック血液センター）
小見山　貴代美　（豊田厚生病院）
鳥海　綾子　（慶応義塾大学病院）
長村　登紀子　（東京大学医科学研究所附属病院）
奈良　美保　（秋田大学医学部附属病院）
野﨑　昭人　（横浜市立大学附属市民総合医療センター）
東山　しのぶ　（奈良県総合医療センター）
日髙　陽子　（東邦大学医療センター大森病院）
藤井　紀恵　（藤田医科大学病院）
藤田　浩　（墨東病院）
牧野　志保　（岡山県赤十字血液センター）
松本　真弓　（神鋼記念病院）
森山　昌彦　（東京都立多摩南部地域病院）
山崎　喜子　（海老名総合病院）
山田　麻里江　（佐賀大学医学部附属病院）
吉田　雅弥　（熊本赤十字病院）
米村　雄士　（熊本県赤十字血液センター）

担当理事

池田　和彦　（福島県立医科大学）